

令和 3 年 4 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13566

研究課題名(和文)中国南北朝仏塔の考古学研究

研究課題名(英文)An Archeological Study of Chinese Pagodas in the Southern and Northern Dynasties

研究代表者

向井 佑介(Mukai, Yusuke)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：50452298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国南北朝時代(5～6世紀)の仏教寺院の遺跡と遺物を主要な分析対象とし、関連する考古資料・図像資料・文献史料などを総合的に検討し、塔の上部構造、塔の内部空間(塔内の荘厳)、塔の地下空間(舍利埋納空間)、寺院内部における塔の配置、という4つの視点から、中国初期仏塔の空間構造とその思想的背景を明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国南北朝の仏塔と仏教寺院の構造を初めて体系的かつ実証的に明らかにしたものである。その研究成果は、中国仏塔と仏教寺院の構造的解明にとどまらず、塔はなぜ高層化したのか、双塔伽藍にはなぜ2基の塔があるのか、といった問題にせまり、そこに中国独自の歴史的背景が存在したことを明確にした。これは、100年前に近代日本の学者たちが提起した仏塔の受容と変容をめぐる問題に対し、初めて科学的・体系的な裏づけをもって解答を与えたものといえるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research made the Chinese ruins and remains of the Buddhist temples in the Northern and Southern Dynasties applicable to analysis. Through the synthetic examination to archaeological resources, iconographic images and literature historical records, I clarified the spatial structure and ideological background of the early Chinese pagodas from four viewpoints: (1) the superstructures of pagodas, (2) the interior designs of pagodas, (3) the underground structures of pagodas, and the compositions of temple buildings.

研究分野：歴史考古学

キーワード：仏塔 楼閣式仏塔 舍利 舍利荘厳具 雲岡石窟 双塔伽藍

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 初期の研究と問題の提起

日本の古代寺院にみる塔の祖型が中国にもとめられることは、つとに通説化している。なかでも、中国初期仏塔の成立過程、すなわちインド起源の仏塔(ストゥーパ)が中国へと伝来して楼阁式仏塔を創出した過程については、20世紀前半より関野貞・濱田耕作・村田治郎をはじめとする日本の建築史・考古学者らがさまざまに論じてきた。ただし、それらは限られた文献史料と図像資料をもとにした仮説にすぎず、実物による裏づけを欠いていた。その後、ながらく資料の不足からこの問題に正面からとりくんだ研究はあらわれなかった。

(2) 近年の資料増加と研究の進展

しかし1990年代後半以降、北魏洛陽永寧寺、方山思遠寺、朝陽北塔(思燕浮図)北齊趙彭城仏寺、核桃園遺址(北齊大莊嚴寺)などの発掘調査成果が日中両国で整理されて陸続と公開され、5～6世紀の仏教寺院についての知見は大幅に増加した。これにより、とくに北魏から東魏・北齊代における仏教寺院の展開について、実証的な研究が可能となってきた。本研究は、研究代表者自身によるこれまでの北魏雲岡石窟・方山思遠寺・朝陽北塔など5世紀の仏教寺院に対する研究成果を基盤とし、それを大幅に発展させることで、中国初期仏教寺院の構造と思想を体系的に明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

(1) 中国南北朝寺院の構造解明

本研究は、中国南北朝時代の仏塔と仏教寺院を主要な対象とし、考古学的に発掘された寺院の遺跡と遺物、石窟彫刻や造像にあらわれた仏塔の図像、文献史料の記載などにもとづき、塔の上部構造(外観)内部構造(塔内の荘嚴)地下構造(塔下の舍利埋納施設)寺院内における塔の配置、という4つの方面から中国初期仏塔の空間構造を立体的に解明するとともに、その構造の背景にある儀礼・信仰・思想をさぐるものである。そして、中国・朝鮮三国・日本の古代寺院を比較することにより、中国において成立した楼阁式仏塔が東アジア各地へと伝播するにあたり、いかなる変容をとげたのかを究明することを目標とした。

(2) 東アジア寺院建築のもつ本質的意味の究明

中国の楼阁式仏塔が、インド文化と中国文化との融合によって生みだされたことは、その構造からみて疑う余地がない。それが中国から朝鮮半島や日本列島へと伝播したことも、建築遺構や考古資料によって裏づけられる。しかし朝鮮三国や日本の初期仏教寺院は、伝播の過程で情報が取捨選択され、定型化し、パターン化したものであるがゆえに、それだけをみても本来の意味を明確にできない場合が少なくない。中国初期仏塔と仏教寺院の検討をつうじて、東アジアの寺院建築や伽藍配置のもつ本質的な意味を究明することが、本研究の最大の目的である。

3. 研究の方法

(1) 塔の上部構造の分析

北魏の石塔や雲岡石窟・龍門石窟などにあらわされた5～6世紀の仏塔意匠を網羅的に集成し、それらの基礎的な分類と編年をふまえ、各類型の系譜と明確にした。また、雲岡石窟台地上で発見されたいくつかの塔址について、遺構状況の観察をもとにその上部構造を推定した。

(2) 塔の内部空間の検討

おもに塔の遺構から出土した塑像や壁画に着目して検討をおこなった。5世紀後葉の北魏方山思遠寺・朝陽北塔下層遺址(思燕浮図)・懷朔鎮仏寺遺址の資料についてはすでに研究成果を公表済みであることから、6世紀の北魏後期の洛陽永寧寺と東魏・北齊代の鄴城趙彭城仏寺址を主要な分析対象とし、出土遺物の観察と遺構状況をもとに塔内の塑像安置状況を考察した。

(3) 塔の地下空間(舍利埋納)の検討

南北朝寺院から舍利函が発掘された事例は、北魏興安二年(453)石函、北魏太和五年(481)石函、鄴城趙彭城仏寺址、核桃園仏寺址(北齊大莊嚴寺)、桐廬博物館所蔵南朝舍利石函があり、朝鮮三国や古代日本の事例と比較しつつ、舍利埋納の変遷とその伝播過程を考察した。

(4) 寺院内における塔の配置

朝鮮三国や日本の古代寺院への影響を視野に入れつつ、堂塔の配置(伽藍配置)について考察した。中国における初期の伽藍配置が塔を中心とした構成であったことは先行研究により指摘

されており、また研究代表者自身の過去の研究でもそれを論証している。本研究では、こうした初期の単純な伽藍配置が北朝後期から隋唐代にかけて複雑化していく過程を、考古資料と文献史料の両面からあとづけ、伽藍配置が変化した思想的背景を追究した。

4. 研究成果

(1) 後漢・三国の仏塔関係資料の集成・検討

近年、湖北省襄陽から出土した相輪をもつ樓閣明器、かつて河南省鞏県の窖蔵から発見された銅製ストゥーパなどの特殊な青銅器、そして洛陽において収集されていた2世紀後半ないし3世紀のものとするカロシュティー文字銘をもつ石片などに着目し、文献史料と対比しつつその学術的意義を再検討した。

(2) 北魏興安二年(453)舍利石函の検討

1960年代に河北省定県の静志寺舍利塔地宮から出土した北魏興安二年(453)銘の石函について検討した。近年公表された石函の実物および拓本をもとに、側面に線刻された図像の描き起こし図を作成した。そして、石函の図像に特徴的な山岳紋様・比丘図像に着目して、雲岡石窟・敦煌莫高窟・キジル石窟などの類例と比較しつつ図像系譜を整理し、その思想的背景を考察した。その成果は、論文にまとめて学術誌に掲載した(向井佑介「北魏興安二年舍利石函の図像学」『東方学報』京都第94冊、2019年)。

(3) 南北朝仏塔の舍利埋納の研究

東晋から南北朝時代の舍利埋納について、考古資料と文献史料の両面から整理した。まず、近年公表された浙江省桐廬県の南朝舍利石函について検討し、石函蓋の蓮華紋や石函側面の獅子・香炉・側視形蓮華などの表現からそれが梁代に位置づけられることを確認し、あわせて文献史料に記載される東晋・南朝の舍利埋納の事例を整理した。また、北魏太和五年(481)石函の出土状況・銘文・埋納文物について再検討し、さらに北朝後期の趙彭城仏寺址と核桃園仏寺址の例についても朝鮮三国や日本の古代寺院との比較分析を進めた。

(4) 雲岡石窟の寺院景観の再検討

研究代表者がこれまでに発表した雲岡石窟出土瓦の編年と雲岡石窟の仏塔意匠についての研究成果をふまえ、新たに再検討した戦前・戦中の調査記録や調査写真、そして現地研究機関による近年の発掘調査成果を照合することにより、雲岡石窟の寺院景観とその変遷を明らかにした。490年前後に建設された西部台上寺院址は方形僧院のなかに塔を配したもので、やや遅れて石窟東方に建設された東台遺址の塔址は、割石積の基壇上に割石積の牆壁と石壇を設け、木造瓦葺の屋根をさしかけた塔址である。これらの検討をもとに、北魏の洛陽遷都前には、石窟の前面と台地上に寺院建築がならび、さらに石窟東西の丘陵先端に塔が林立する景観が出現していたことを明確にした。

(5) 双塔伽藍の成立背景についての研究

中国では唐代以前にさかのぼる双塔伽藍の遺構は現存しないため、必然的に文献史料や図像資料からの検討によらざるをえない。4世紀東晋の寺院では、インドやガンダーラの寺院にみる奉獻塔の造営や塔の増広のように、複数の塔を建立したり、塔を増築したりする場合があった。北朝から隋唐期の双塔は、それとは発想が異なる。5世紀の北魏では孝文帝と文明太后の「二聖」のため暉福寺に双塔が建立され、雲岡石窟でも双窟や双塔の表現が流行した。隋代には、同じく「二聖」「二皇」と称された文帝と献后のため大莊嚴寺と大總持寺にそれぞれ七重塔が造営され、また法界尼寺にも双塔が建立された。初唐期には高宗と武后が「二聖」と称され、武后の革命と密接にかかわる長安の大雲経寺にも双塔が建てられた。それらの影響のもと、同時期の新羅や日本にも双塔伽藍が伝えられたと推測した(向井佑介「中国における双塔伽藍の成立と展開」菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』思文閣出版、2019年)。

(6) 上述の成果をまとめて、研究代表者の既刊論文とあわせて、『中国初期仏塔の研究』(単著、臨川書店、2020年、右写真)と題する学術書を出版した。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 向井佑介	4. 巻 94
2. 論文標題 北魏興安二年舍利石函の図像学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学報	6. 最初と最後の頁 89-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250674	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 向井佑介	4. 巻 1
2. 論文標題 中国における双塔伽藍の成立と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』思文閣出版	6. 最初と最後の頁 421-440
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 向井佑介	4. 巻 19
2. 論文標題 雲岡石窟的佛塔意匠	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』（中国語版）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 向井佑介	4. 巻 南山城編
2. 論文標題 和束の石造物	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都学研究会編『京都を学ぶ 文化資源を発掘する』	6. 最初と最後の頁 138-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 向井佑介	4. 巻 19
2. 論文標題 雲岡石窟の仏塔意匠	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 向井佑介	4. 巻 17
2. 論文標題 日本考古学の100年と中国考古学研究 20世紀前半の調査資料にもとづく新たな研究視角	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国考古学	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 向井佑介
2. 発表標題 中国の瓦窯 土器生産との関係を中心に
3. 学会等名 窯址研究会等シンポジウム『土器窯と瓦窯の接点』(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 向井佑介
2. 発表標題 胡漢の文化交流と交易
3. 学会等名 明治大学日本古代学研究所国際シンポジウム「社会変化とユーラシア東西交易 考古学と分析化学からのアプローチ」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 向井佑介
2. 発表標題 中国秦漢から隋唐時代の瓦窯構造とその影響
3. 学会等名 窯跡研究会 第15回研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 向井佑介
2. 発表標題 中国魏晉南北朝都城の考古学 宮殿・陵墓・寺院
3. 学会等名 第30回濱田青陵賞記念シンポジウム「卑弥呼と倭の五王の時代の中国都城」（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 向井佑介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 316
3. 書名 中国初期仏塔の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関